

小田部雄次著

〈ミネルヴァ日本評伝選〉

紹介

『昭憲皇太后・貞明皇后——一筋に誠をもちて仕へなば——』

ミネルヴァ書房 平成二十二年十一月 四六判 三九四頁 本体三〇〇〇円



明治天皇の皇后として明治維新後の近代国家創設に多大な役割を果たされた昭憲皇太后と、大正天皇の皇后として昭憲皇太后の御心を継承された貞明皇后。本書は昭憲皇太后と貞明皇后の御生涯における御事蹟やエピソードを網羅し細部にわたり丹念かつ簡潔平易に纏めたもので、昭憲皇太后及び貞明皇后研究の基礎資料と言える良書である。

本書はⅡ部構成であり、第Ⅰ部「昭憲皇太后——孤高の女神」は、第一章「鑑の空白」・第二章「五摂家の娘」・第三章「皇后美子」・第四章「新時代の皇后」・第五章「和魂と洋才と」・第六章「近代女子の模範」・第七章「大元帥の伴侶」・第八章「日露戦後から晩年へ」の八章から成る。続く第Ⅱ部「貞明皇后——祈りの女帝」は、第九章「皇太子妃としての決意」・第十章「東京生まれの皇后」・第十一章「近代最初の皇太子妃」・第十二章「大正の諸相」・第十三章「若き皇太子の後見として」・第十

四章「戦時下の宮中」・第十五章「神性なき時代」の七章により構成される。それぞれの章は概ね四〜五節から成り、さらに細かい小題が付され、図版写真や図表も豊富で読みやすい内容となっている。さらに巻末には「主要参考文献」として新聞・日記類・伝記類・回顧録などのリストを掲載するとともに、「昭憲皇太后・貞明皇后略年譜」を附し、研究者の便宜に供している。

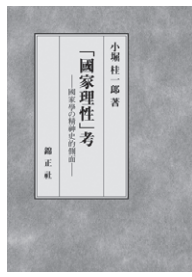
昭憲皇太后も貞明皇后もともに五摂家の御出身であり、近代の皇后として女子教育や福祉事業に御仁慈をそそがれたことなど共通点も多いが、著者は、本書において「両皇后の類似性と個別性を整理しながら、近代日本の生成と発展に果たした皇后の役割を明らかに」することを試みている。なお、著者には本書のほかに『梨本宮伊都子妃の日記』『ミカドと女官』『四代の天皇と女性たち』『李万子』『皇族に嫁いだ女性たち』等々、多くの皇族・華族に関する出版がある。

小堀桂一郎著

紹介

『「國家理性」考——國家學の精神的側面——』

錦正社 平成二十三年六月 A5判 二二四頁 本体二五〇〇円



本書の書名ともなっている、第一章「國家理性」考——日本史に於ける「理性」の役割——では、イエズス会との関りを中心に安土桃山時代から江戸期に至るまでに培われてきた日本の「國家理性」とは何か——について考察がなされている。第二章「慣例法の生成過程——關東御成敗式目」誕生の意味——では、鎌倉時代を「道理」の世紀であるとし、法制史上における慣例法成立の意義について論じ、続く第三章「神道の根據としての「聖なるもの」——homo religiosus の擁護と再生のために——」では、日本人にとっての宗教とは何か、そして「神道とは何か」という問題についての考察を行い、東西における宗教観の比較から日本人と神々との関係について論じている。第四章「維新と傳統——兩概念の相互關係及びその總合——」では、維新の本意を明らかにし、同時に大変革を遂げた維新时期にあっても断絶せずに受け継がれてきた伝統との関係について考察を行い、第五章「教育に於ける道徳と

宗教——二者の辯別は必須にして且つ可能なるか——」では、道徳教育は宗教を抜きにして成り立つのか、との問題について、前章で考察した神道の独自の立場から、戦前と戦後に於ける道徳教育の変容について指摘している。第六章「東京裁判「鵜澤總明最終辯論」考——異文化差別の現場から理性への訴へ——」では、その副題にみえるように、異文化間に於いても共有されるべき、「理性」についての考察を行い、最終章である第七章「統帥權と文民統制原理——天皇と軍隊・過去の理念型と將來の難問——」では、天皇と法・軍隊との関わりについて論じ、統帥權の意義を改めて問い直し、また「統帥權の在るべき位置」についての考察を行い、結語としている。

本書は、その副題にもみえるように、國家に関わる主題において、その背後に一貫して存在する「理性」について考察し、「精神的側面」から日本史の本質を明らかにしようと試みた一冊である。

伊藤之雄著

〈中公新書〉

紹介

『昭和天皇伝』

文藝春秋 平成二十三年七月 A5判 五八八頁 本体二一九〇円



本書は『明治天皇―むら雲を吹く秋風にはれそめて―』（ミネルヴァ書房、平成十八年）に引き続き、著者が昭和天皇研究の集大成として上梓したものであり、「あとがき」に学生時代当時、井上清が著した『天皇の戦争責任』（現代評論社、昭和五十年）の「昭和天皇は日本の唯一最高の統治権者であり、主体的に判断し、決意して戦争を発動し指揮した」とする明快な論理に対し強い違和感を覚えたことから関心を持つようになったと述べている。

はじめに「昭和天皇は『現代の君主のなかでもっとも率直ならざる』人間か―はじめに」と題し、中曾根元首相による人柄評価からさまざまな昭和天皇像に対しなぜそんなに異なるのかを解説、第一部では昭和天皇の生い立ち、少年時代、明治天皇への憧れと大正天皇への敬愛、大正デモクラシー・渡欧・御成婚による新しい世界への目覚め等を紹介、第二部では大日本帝国の立憲君主としての統治を主題に、新帝としての気負い、誇りと正義感

の代償、ロンドン条約・満州事変による重圧と自信喪失、国際連盟脱退と二・二六事件による国際的孤立と軍統制への不安、そして三国同盟による見通しのない戦争、日米開戦への危機と、そして神に御祈念するしかない戦争状態、本土決戦か敗戦かにおける「一撃講和から降伏の決断」へと窮地にお立ちになれる状況を描き、第三部では「象徴天皇としての戦後」と題して天皇制を守る―民主化と象徴天皇制の成立、サンフランシスコ講和条約における退位問題について、象徴天皇と戦争責任への心の傷―日米安保体制と豊かな日本への道、おわりに「昭和天皇と昭和という時代」で、昭和天皇の評価が大きく二つに分かれる点について、あらためて昭和天皇のご生涯を確かな資料に基づいて再確認をなし、肯定的な立場で筆を置いている。昭和天皇についての多くの本が出版されているが、批判的な書籍の多い中で確かな資料で解説された本書を是非必読願いたい。

古川隆久著 〈中公新書〉

紹介

『昭和天皇——「理性の君主」の孤独——』

中央公論新社 平成二十三年四月 新書判 四三二頁 本体一〇〇〇円

昭和に続き平成の時代になってからも、昭和天皇に関する書籍が多く出版されている。しかし、その多くが「昭和天皇の発言の断片や逸話のいくつかを自分の政治信条（イデオロギー）に基づいて解釈したようなものが大半」であると著者は述べている。そこで本書はさまざまな史料を突き合せて歴史像を構築していく実証史学の手法としてあくまで実証的な方法で近代国家の君主のあり方を考察しようとしている。

第一章「思想形成」では昭和天皇の生い立ちから筆を起こし、東宮御学問所でのご教育、ご訪欧旅行、摂政就任等により昭和天皇はどのような思想信念をお持ちになったのか、第二章「天皇となる」では、田中義一内閣への不審と田中首相叱責事件、ロンドン海軍軍縮条約問題による天皇のご意見、第三章「理想の挫折」では満州事変に始まった戦争拡大にご憂慮されるが、五・一五事件、二・二六事件、天皇機関説事件と軍国主義は益々エスカ

レートし、第四章の「苦悩の聖断」では、盧溝橋事件の勃発による日中戦争と長期化に苦慮される天皇、三国同盟に対するご憂慮、そして日米交渉に期待をお寄せなるも、益々悪化の一路を辿っていく事によりやむなく開戦をご決断、大東亜戦争と突入する。

そしてポツダム宣言に対する昭和天皇の「終戦の聖断」をされる。

第五章「戦後」では天皇の戦争責任についてご退位問題の中で「人間宣言」についての意見、そして「講和問題と内奏」では昭和二十六年のサンフランシスコ平和条約後の天皇の御役割、二度目のご訪欧とご訪米、世論調査に見る昭和天皇のご存在、そして崩御。「おわりに」では昭和天皇が目指された理想実現に尽力されたこと、そして常に戦争責任と向き合われた御姿について語られている。伊藤之雄著の『昭和天皇伝』との比較も興味を引く。



西川誠著 〈天皇の歴史07〉

紹介

『明治天皇の大日本帝国』

講談社 平成二十三年十一月 四六判 三九〇頁 本体二六〇〇円



講談社が創業百周年を記念して刊行した叢書『天皇の歴史』は、「日本史を天皇から読み直せば、新しい日本像が見えてくる」をコンセプトにして、すでに平成二十二年から刊行が開始され、全十巻が刊行されている（さらに本年三月に電子書籍版が配信されている）。各巻とも近年の研究成果を踏まえながら、宗教と芸能という天皇の文化的側面について、それぞれ一巻ずつ当てているのも本叢書の特徴の一つと言えるだろう。本書はその第七巻に当たる。著者の西川誠氏は、本年七月三日、明治天皇百年御式年に当たり、天皇・皇后両陛下に明治天皇の御事績を御進講された経験を有している。恐らく本書の刊行がきっかけになったのであろう。

西川氏は「江戸時代の天皇との違いは何だろうか、明治天皇は政治的にどのように成長してきたのであろうか」という点に関心」（三四一頁）があるという。そこで本書では、①江戸時代から何が継続し、明治に何が変わえられ、

付け加えられたかを儀礼・祭祀・文化等を中心に整理すること、②政治の分野において制度的な天皇だけでは捉えきれない、生身の政治家の成長と決断の積み重ねを検討すること、③近年の国民国家論の成果を汲み取りつつ、明治天皇が「我らの大帝」として認識されていく過程を検証することを課題とし、明治天皇とその時代が六章にわたって叙述されている。

先に刊行された伊藤之雄氏の『明治天皇―むら雲を吹く秋風にはれそめて―』（ミネルヴァ書房、平成十八年）との比較も興味深い。天皇の政治的側面については、基本的に伊藤氏の提示した枠組みに準拠しつつ、伊藤氏が十分に触れることのなかった天皇の文化的側面にも目を向けている点、本書の特色の一つであろう。本書が描く明治天皇像は、「欧化と復古に生きた「大帝」」である。この序章の章題が、著者が本書で描く明治天皇像のすべてを物語っている。

藤田覚著

『近世天皇論——近世天皇研究の意義と課題——』

清文堂出版 平成二十三年十二月 四六判 二八九頁 本体二八〇〇円

近世天皇研究の
意義と課題

近世天皇論

藤田 覚

清文堂

藤田覚氏は、「寛政の改革」から「天保の改革」までの時期を中心とする近世政治史の研究者として著名であるが、『幕末の天皇』（講談社選書メチエ、平成六年）、『近世政治史と天皇』（吉川弘文館、平成十年）などがあるように、光格天皇の時代を中心に近世天皇・朝廷研究を開拓してきた第一人者でもある。近世の天皇・朝廷研究を行なうほどの研究者ならば、藤田氏の研究成果を参照しない人はいないであろう。本書は、「近世政治史研究の一環として天皇・朝廷の動向、朝廷と幕府の関係を論ずるという視角から」（あとがき）、名著『近世政治史と天皇』以後に書かれた論考・エッセイをまとめたものである。

本書は、総論「近世王権論と天皇」、第一部「江戸時代の朝幕関係」、第二部「朝廷の再興・復古と光格天皇」、第三部「逆転する朝幕関係」、終章「近世天皇研究の意義と課題」という三部構成であり、江戸初期から幕末までを見通すことができる。あまり先行研究のない明正天

皇・後桜町天皇を論じた「江戸期女性天皇に見る皇位継承の論理」（第一部）や、得意の光格天皇について論じた「光格天皇―復古と革新―」（第二部）など、興味深い論考・エッセイが収録されている。また本書の随所に見られる文書論・史料論は、長年、東京大学史料編纂所に関わってきた藤田氏ならではの論と言えよう。

最後に近世天皇・朝廷研究の意義と課題が述べられる。藤田氏は、「なぜ天皇は続いたのか」という日本史研究最大の課題に答えるための重要な素材・対象として近世の天皇を捉え、そこに研究の意義を見出している。そのためには、①近世の国家・政治・社会・文化・宗教における天皇の位置と役割を具体的に明らかにすること、②天皇の政治的浮上・復活の具体的契機と歴史過程を、事実に即して具体的に明らかにすることが重要であると言ふ。本書は、今後の近世天皇・朝廷研究の指針の一つとなるであろう。

犬塚孝明著

紹介

『海国日本の明治維新―異国船をめぐる一〇〇年の攻防―』

新人物往来社 平成二十三年六月 四六判 二八六頁 本体一九〇〇円



明和八年（一七七二）、一隻のロシア船が日本に渡来した。このとき、乗員モーリツ・フォン・ベニョフスキーから、オランダ商館長に宛ててロシアの日本侵略を告げる情報もたらされた。実は虚言で飾り立てられたこの情報、日本に大きな波紋を呼び起こす。大ロシアに対しての恐怖は、日本の知識人の世界観を大きく変え、「刻々と迫る西欧列強のアジア侵略、その侵略から日本を救うにはどうすればよいか。海に近い東北の一隅、仙台に暮らす知識人林子平が考えた『海国日本』のあり方、それが次第に大きな広がりを見せつつ、日本人の世界に対する認識を変える原動力」（「まえがき」）となった。

本書は、明和八年のハンペンゴロ事件から、明治四年（一八七一）の岩倉使節団の派遣に至る百年間を対象に、四章にわたって論じている。著者が目指したのは、「十八世紀末に成立した『海防』という軍事的な国家防衛意識が、変転する国際的環境のなかで、徐々にその姿、形

を変えつつ、貿易立国意識へと昇華していく過程を、幕末知識人たちの国際認識を通して」（「あとがき」）描くことであった。本書の特色は、世界史との連動のなかで日本の幕末史が論じられている点にある。本書を通して私たちは、一見、日本と関係のない世界史上の事件が、実は日本にも大きな影響を与えていたことを知ることができるだろう。そして本書の掉尾を飾るのは、伊藤博文の輝かしい「日の丸演説」。伊藤はここで「欧米」なみに「進歩」と「改良」を目指す近代国家日本の、また「貿易立国」日本の門出を高らかに宣言した。

本書は、近代日本対外関係史研究の第一人者が描く、「西洋という未知の世界へ果敢な挑戦を試みた幕末の知識人たちが、正しい国際認識を身につけ、新しい近代国家をつくり上げるまでの百年の物語」（「まえがき」）。国際社会における日本のあり方を考えたい方にお勧めしたい。

松浦光修編訳

紹介

『新訳 留魂録——吉田松陰の「死生観」——』

PHP 研究所 平成二十三年十月 新書判 三六〇頁 本体九五〇円

本書は吉田松陰が処刑される前日に書き上げたと思われる『留魂録』の現代語訳を中心に、松陰の「死生観」を紹介したものである。

各章の構成は、「前文」「本文」「余話」からなっており、「前文」と「余話」によって当時の松陰のおかれた状況や時代背景が解説されているため、「本文」理解の助けとなっている。各章で挙げられている史料をみると、第一章「死生を想う」では、『冤魂慰草』（安政二年—六年）、「七生説」（安政三年四月十五日）を、第二章「死生に対す」では、「某あての手紙」（安政六年正月十一日）、「三人の亡き友を慰霊する文の序」（安政六年三月中旬）を、第三章「死生を悟る」では、野村和作、入江杉藏、品川弥二郎にそれぞれあてた手紙（各・安政六年四月）から、そして、第四章「死を決す」では、高杉晋作宛てた手紙（安政六年七月中旬）と自身の父と叔父、そして兄にあてた手紙（安政六年十月二十日）の現代語訳を中

心に構成され、一章から四章までは、それぞれ『留魂録』以前の手紙や論文から松陰の「死生観」を紹介している。続く第五章「死を定む」、第六章「死生を分かつ」では、『留魂録』上・下（安政六年十月二十六日）がそれぞれ現代語訳によって紹介されている。第七章「死生を超えて」では、松陰の妹である千代の『日本及日本人』に掲載された談話が紹介されている。

本書は当然その主人公として吉田松陰を設定しているが、松陰が同志と称す金子重之助、そして『留魂録』が記されてから、十七年後に突如として『留魂録』を手にすることとなった野村和作（靖）を脇役と設定することにより、深く松陰の「死生観」を、さらには人間像を提示している。平易な現代文で記されているが、史料の随所に原文を、巻末に『留魂録』原文を付すなど、原文がもつ魅力も味わうことができ、松陰の「死生観」を知る上での最良の入門書といえるだろう。



伊藤隆著

紹介

『評伝 笹川良一』

中央公論新社 平成二十三年七月 四六判 三六七頁 本体二二〇〇円



「日本の首領(ドン)」「一日一善」、昭和の時代を駆け抜けてきた中高年の人たちが、笹川良一を思い出すとしたならば、このような言葉ではないだろうか、国粋大衆党の党首、衆議院議員、A級戦犯の容疑者、「戦犯者」の援護、モーターボート競走の創立者、そして日本最大の社会貢献団体のトップとして、昭和の時代を生き抜いた「大物」であることは間違いない。ただ残念な事に笹川に對する一般国民の印象があまり良くないのが現状である。

しかし、この著を一読すればそれらの想念は払拭される。それは確かな資料に基づいて解説された内容であり、根拠となっている。第一章では「若き日」と題して中学校に進学しなかった理由、また国粋大衆党以前と結成後の経緯を説明、第二章「飛行機乗りの夢」では自分の果せなかった夢を飛行士の養成学校の創立というかたちで実現を見る。第三章では「裁判闘争と国政への進出」では、笹川が総裁である国粋大衆党が暴力団の嫌疑を掛け

られるが、笹川が極めて政治的なものである事を強調して、無罪判決を勝ち取っている。そして総選挙へ出馬、見事に当選して国政への進出を果たした。第四章「東京裁判」ではA級戦犯の容疑をかけられ、巣鴨拘置所(スガモブリズン)で獄中生活を送るが、これにより多くのA級戦犯者と密接な関係になり、後の活動に役立った事を説明している。

第五章「戦犯者を救え」では、GHQの一方的に犯罪者にされた戦犯者たちの救済活動に入るのである。第六章「モーターボートと戦後日本」は戦後の笹川を語る場合、最大の問題が競艇であることは疑いない。終章の「笹川の逝去とその後」では人生二百歳を標榜していた笹川も平成七年七月十八日に死去した。享年九十六歳。その際の各報道機関及びジミー・カーター元アメリカ大統領の弔辞を紹介して本書を終わらせている。

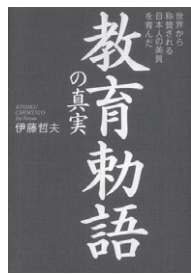
笹川の歩んだ人生をあらためて見つめ直す書である。

伊藤哲夫著

紹介

『教育勅語の真実』

致知出版社 平成二十三年十月 四六判 一八四頁 本体一四〇〇円



本書は教育勅語の成立前史から起草過程、また渙発後にもたらした影響までを、明治政府のグランド・デザインと称される井上毅を主人公として描いたものである。平成二十三年三月十一日の東日本大震災における日本人の対応は、世界各国からの賞賛を受けた。著者は、日本人がそのような対応を行うことができた要因を教育勅語の存在に求める。そして教育勅語を「日本人の心のDNA」と称し、そのDNAが現在の日本人の中にも存在するとし、このような問題意識をもって、「日本人の良質な精神、行動を生み出した『教育勅語』とは、どのようなものだったのか。改めてその成立過程」をみていこうとするものである。

第一章「なぜ『教育勅語』が求められたのか」では、明治維新以降の西洋化に伴う道徳教育の動揺と、所謂「徳育論争」に焦点を当て、教育勅語の成立に至るまでの動機を明らかにしている。第二章「井上毅という人

物」では、教育勅語の中心的起草者であった井上毅に焦点を当て、その生い立ちから学問まで幅広く井上の思想をみていく。第三章「こうして『教育勅語』案は起草された―その誕生物語―」では、その成立過程を先行研究によりつつ簡潔にまとめ、第四章「『教育勅語』が果たした役割」では、井上にまつわる逸話や海外における評価から、教育勅語が渙発後に与えた影響について紹介している。第五章「現代日本人にとっての『教育勅語』」では、これまでの考察を通して「東北復興とともに、日本の復興が問われる今、失われつつある『日本の心』を取り戻すためにも、改めて教育勅語のもつ普遍的な道理を正しく理解し、改めて実践する時代が到来しているのではない」か、との提言を行っている。

本書は一般書でありながらも、多くの引用を用い、資料を付すなどして、教育勅語を知る上での最良の入門書ということができるとであろう。

岡野弘彦・金美齢・高橋史朗・畠山圭一・松浦光修・竹田恒泰著

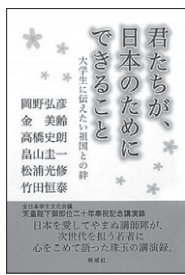
紹介

『君たちが、日本のためにできること』—大学生に伝えたい祖国との絆—

明成社 平成二十三年三月 B6判 一九五頁 本体一八〇〇円

本書は、全日本学生文化会議の大学生が企画し、各自の大学を会場に主催した天皇陛下御即位二十年奉祝記念講演会の記録である。各講演は、平成二十一年十一月十四日の「天皇陛下御即位二十年をお祝いする全国学生大会」を皮切りに、東京大学・國學院大學・長崎大学・佐賀大学・同志社大学・福岡教育大学の計六大学で開催され、参加者総数は約一千名にのぼった。本書に収録された講演録は、岡野弘彦「和歌に宿る魂の力―濃密な心の交流の世界―」、金美齢「愛する日本の学生たちに伝えたいこと」、高橋史朗「『自分づくり』から始める日本再生」、畠山圭一「心を尽くす生き方―日本の国柄を理解するため―」、松浦光修「みはしのさくらちらぬその間に」、竹田恒泰「皇室を戴く日本の国柄」の六本である。次世代を担う若者に、日本を愛してやまぬ講師陣が、伝えようとしたことは何か。岡野弘彦は、日本の伝統的な和歌は祈りの言葉の結晶であり、魂を揺さぶる命ある

歌の調べを感じ、理解し、表現することにより一番大事な目標が見えてくると語り、全生涯をかけ日本人としての良き魂を深めて次の子孫に継承していくことを提言する。金美齢は、国際社会で高く評価されている日本をこのままの形で次世代に受け渡すことが今生きている人の責任であるとエールを送る。高橋史朗は、日本人が元来持っていた親子の絆、地域の絆、祖先との絆、皇室との絆を回復していくために、歴史や伝統や文化を再発見する必要を説く。畠山圭一は、日本文化は学問の探求と人生の探求が一つの道になるという特質を持つと論じる。松浦光修は「ご聖徳」を仰ぐのみならず、それに対応しようという気力をふり絞り行動につなげる時、漸く日本再生への重い歯車が回り始めると語る。竹田恒泰は、我が国の国柄の本質は天皇陛下と国民の絆であると強調する。いずれも次代の日本を担う大学生へ心を込めて語られた珠玉の講演録であり、広く一般にも推奨したい。



紹介

『講座 明治維新』 第四卷

有志舎 平成二十四年三月 A5判 二九六頁 本体三四〇〇円



明治維新史学会の発足三十周年の記念事業として企画・刊行された。全十二巻の刊行予定で、これまで第一巻から第四巻が刊行されている。各巻は、総論と個別論文から構成されているが、個別事象を明治維新史の総体のなかに位置づけることが意図されている。また現在の明治維新史研究の水準を知る上でも有用な叢書と言える。巻末の文献目録も有用である。

本書第四巻は「近代国家の形成」がテーマにされ、明治四年（一八七二）の廃藩置県以後、明治十四年の政変までの十年間が取りあげられている。「この約一〇年間で日本近代国家の形成過程をとらえ、政治史を中心として考察すること」（勝田政治「総論 近代国家の形成」）が、本書の課題である。本書は、冒頭に収録論文の紹介を兼ねる勝田政治氏の「総論 近代国家の形成」を置き、七編の個別論文から構成されている。文明開化政策、征韓論政変と大久保政權、士族論など、それぞれ興味深い

テーマが選ばれているが、第七章に坂本一登氏の「明治天皇の形成」が収録されている。

同論文は「明治天皇が政治的君主としていかに形成されたのかという問題」を扱ったもので、明治初年の宮中改革から天皇親政運動までの時期を対象に、元田永孚・木戸孝允・岩倉具視・伊藤博文の四人の役割に注目しながら論じている。坂本氏は「君主としての天皇の権力は、明治一〇年代を通して複雑で微妙な交渉の末、次第に内閣を中心とする国家運営に資するように制度化されていった。伊藤の政治指導を通して、藩閥政府との一体化と内閣輔弼の原則を受容した天皇は、基本的に内閣や元老の輔弼を前提とした受動的な政治君主であった」と結論づける。その君主像が「西欧的な「立憲君主」というよりは、むしろ元田が夢見た儒学的君主に似ていた」とする論は、明治天皇のみならず、近現代の天皇像を考える上でも示唆に富む意見であるように思われる。

小川原正道著

紹介

『福澤諭吉の政治思想』

慶應義塾大学出版会 平成二十四年四月 A5判 二八〇頁 本体四五〇〇円

福澤諭吉の政治思想

福澤諭吉は生涯にわたって粘り強く政治と関わり、挑戦し続けた思想家であった。本書は、そのような福澤の政治思想（本書では「政治構想」とも）を、議会・憲法・天皇・外交の四つの視点から考察したものである。併せて福澤の華士族論・宗教論、その政治思想と明治政府との確執についても論じられている。

本書は二部構成で、第一部は議会・憲法・天皇・外交の四つの視点から、福澤の政治思想の構築過程とその構造を論じたものである。第二部は、華士族・宗教といった視点から福澤の人間観に迫る。著者自身、「もとより、福澤研究の蓄積は膨大であり、本書も多くをその成果に拠っている。これらに拠りつつ、なお従来の研究において解決されていない点を示し、これを既知の資料、および新出資料などを用いて説明していこうというのが、筆者のねらいである」（「序」ii頁）と述べるように、本書に収録された各論考は、これまでの『福澤諭吉全集』を

はじめ、著者自身の見出した新出資料、さらには国立公文書館所蔵の公・私文書に至る膨大な諸資料を駆使して論じられている。このように、一次資料を倦むことなく発掘して、実証的に解明していく姿勢は、著者の所属する慶應義塾大学の日本政治史研究の学風と言えよう。

同じような姿勢は、補章として置かれた「明治政府との確執」でも貫かれている。福澤の政治思想に対する政府の対応を論じた補章をより深く理解したい方は、同じ著者による『福澤諭吉―「官」との闘い―』（文藝春秋、平成二十三年九月）を併せて読まれることをお勧めする。最後の「資料 時事新報社説（福澤自筆原稿確認分）」は、慶應義塾福澤研究センター・天理大学附属天理図書館に所蔵されている福澤自筆原稿を翻刻したものの。これこそ本書の基礎となる、著者自身による資料発掘の成果であることは言うまでもない。

西澤直子著

紹介

『福澤諭吉と女性』

慶應義塾大学出版会 平成二十三年十二月 四六判 二八三頁 本体二五〇〇円



本書は、福澤諭吉の女性論を論じたものである。福澤の女性論については、これまで研究がなかったわけではない。ただしそれらは、「福澤の論説を福澤自身の文脈から、つまり福澤のなかでの思想的問題から論じている」のがほとんどであった。これに対して本書は、「福澤の真骨頂を、「実家」と評されるその現実性」にあると見なし、「福澤が女性の地位改善のために行った実践的活動や、同時代人あるいはその後の人々が、福澤の女性論をどう読んでいったのかという点にも焦点を当てながら、福澤の女性論を多角的に検証」したものである。著者によれば、福澤の女性論は彼の「近代化構想と密接に結びついていた」。「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべし」という福澤の有名なことばは、彼の女性論にもそのまま当てはまるものである。これを実現するためには男女は平等でなければならない。福澤は貝原益軒の『女大学』

を徹底的に批判し、変革の自覚を促したが、男性の意識が変わらないかぎり、変化は望めないと考えていた。著者によれば、男性の「この潜在意識を問題とし、女性論と男性論は表裏一体であるという福澤の主張が、女性論の本質であった」という。そして福澤の女性論は、体制側の人々から批判され、逆に反体制側の人々に支持されたが、女性たちによって否定されてしまう。それは福澤が「女性たちにも「一身独立」を求めた」ことにあった。男性と同様に政治や経済を知り、自立して「国の相談相手」になることは、当時の女性たちの置かれていた現状ではあまりにも困難であったからである。そして「福澤が貝原の議論に問題の本質をみたように、福澤の議論にも、現代の私たちを取り巻く問題の本質が隠されている……それを分析し利用していくには、まだまだ有効な議論である」と述べる著者は、そこに福澤女性論の今日的意義を求めている。

徳田武著

紹介

『朝彦親王伝―維新史を動かした皇魁―』

勉誠出版 平成二十三年十二月 A5判 三一九頁 本体四八〇〇円

朝彦親王伝

維新史を動かした皇魁

徳田武著



勉誠出版

幕末の朝廷において、孝明天皇が深く信頼していた人物はそう多くなかった。文久三年（二八六三）十一月十五日、天皇は鳥津久光宛の宸翰において、自分が信頼できるのは朝彦親王と近衛忠熙のみと、その心情を吐露している。この朝彦親王とは、青蓮院宮尊融法親王として、孝明天皇の厚い信任を受けて国事に奔走し、「今大塔宮」と称された中川宮（のち久邇宮）朝彦親王のことである。しかし、かくも孝明天皇に信頼された朝彦親王はどのような人物なのか、その素顔は一般に広く知られているとは言えないだろう。本書は、この知られざる朝彦親王の生涯を、幕末期に焦点を置いて叙述した伝記である。

本書は親王の誕生から叙述されているが、前半部分では、伏見宮邦家親王の第四王子として生まれた親王が、坊官（しやうめ）の女を母にもつゆえに諸大夫の家に遣られ、さらには本能寺に小僧として遣られるという数奇な生い立ち（第一章）、のちに興福寺一条院門跡となった親王と、奈

良奉行を拝命した幕臣・川路聖謨との暖かい交流が印象的である（第二章）。この川路との関係が、本書のモチーフの一つとなっている。そして、第三章から第十章までが本書の核心である。青蓮院時代から八月十八日の政変・禁門の変に至る部分を読むと、親王が紛れもなく幕末維新史の主役の一人であったことがよくわかる。

ただし明治以後の親王の動向が、第十一章で簡単に触れられている程度であるのは残念である。しかしこの時期の親王の動向は、史料的に十分整えられているとは言えない。後学に残された課題ということであろう。晩年、神宮祭主に任命され、神宮の古儀旧典の調査・考証に尽力し、明治二十二年度の神宮式年遷宮に奉仕した親王。来年度、神宮式年遷宮を迎えるにあたり、本書によって親王に思いを致すのもよいかもしれない。

國學院大學研究開発推進センター編

紹介

『共存学——文化・社会の多様性——』

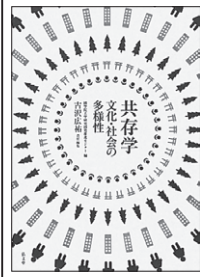
弘文堂 平成二十四年三月 A5判 二八八頁 本体二五〇〇円

本書は文部科学省「二一世紀COEプログラム」(神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成)(平成一四〜一八年)を受けて國學院大學において行われた、「日本発共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクトの成果をまとめたものである。國學院大學の建学の精神に基づいて「自己の生命・共同体の「主体性」と、他者存在への「寛容性」、「謙虚さ」を共に目指す」ことを出発点とした「共存学」は、学部や学科の枠を超えた教員と学生とによって行われている。

本書の構成については、共存学プロジェクトリーダーである古沢広祐氏の「共存への旅立ち——本書のねらいと背景——」に詳しいが、大枠として「第一部 もり・さと・うみ」「第二部 地域・生活・環境」「第三部 近世から近代へ」「第四部 アジアから世界へ」から構成されている。第一部では、公開フォーラム「生命(いのち)と文化の多様性——森・里・海の絆を結ぶ——」における基調講

演である、畠山重篤氏「森、里、海の絆を結ぶ」をはじめ、日本における人間と自然との共生・共存の在り方の多様性について検討がなされている。第二部以降は共存学プロジェクト研究メンバーによる個別研究によって構成されている。第二部では、地域社会における事例研究を中心に、第三部では、歴史的文化的研究を中心に、第四部では世界を視野に含めた広域・グローバル社会研究を中心に展開される。

共存学プロジェクトは「共存」の考え方を根底においたうえで、地球環境の危機から政治・経済的パワーバランスの流動化、人びとの精神性の揺らぎに至るまで混乱を深める現代において、多義的存在様式を含み込みつつ持続的發展を可能とする社会を考察しようとする試みである(二二〜二三頁)とあるように、ますます多様化の一途をたどる現代社会のなかにあって、本書はその問題解決の糸口を探るための貴重な一冊である。



明治神宮監修・米田雄介編

紹介

『明治天皇とその時代——明治天皇紀附図——を読む——』

吉川弘文館 平成二十四年七月 A4判 一九〇頁 本体二八〇〇円



明治天皇の公的な伝記である『明治天皇紀』は、大正三年（一九一四）十二月、宮内省の臨時帝室編修局で編纂が開始され、昭和八年（一九三三）九月、本文全二百六十巻が昭和天皇に奉呈された。このとき、同時に「附図」一帙が副えられていた。この『明治天皇紀』は、明治百年記念事業の一環として、宮内庁で公刊事業を開始され、全十二冊（吉川弘文館、昭和四十三―五十年）にまとめて刊行された。いまや明治天皇のみならず、明治史研究の基本史料として各方面で利用されている。

ただ、昭和天皇に奉呈されたときに副えられていた「附図」は公刊の機会を見ることなく、幻の史料となっていた。しかし明治天皇百年祭を記念して、明治神宮の監修により、この「附図」が刊行された（吉川弘文館刊、本体八〇〇〇円）。ここに四十年以上の歳月を経て、『明治天皇紀』の公刊事業が完結したことになる。

この度公刊された『明治天皇紀附図』は、昭和六年

（一九三二）四月、臨時帝室編修局の命を受けた二世・五姓田芳柳が、『明治天皇紀』の理解に資するため、天皇の主要な御事績を揮毫した八十一葉の水彩画である。二世・五姓田芳柳は、明治・大正を代表する洋画家で、明治神宮奉賛会の委嘱により、明治神宮聖徳記念絵画館壁画の下絵（考証図）を担当したことも知られる（芳柳自身は、第五十図「枢密院憲法会議」を描いている）。『明治天皇紀附図』は、聖徳記念絵画館壁画八十題の画題に「伏見桃山陵」を加えたものである。しかし、絵画の構図は必ずしも同じでない（興味のある方は是非見比べていただきたい）。

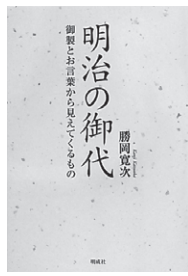
本書は、『明治天皇紀附図』と同時刊行された「書籍版」で、附図の一葉一葉に情景を知らせる簡単な解説と、編者の米田雄介氏による詳細な解説「明治天皇と「明治天皇紀附図」」が付され、附図の鑑賞・読解に多大な便宜が図られている。

勝岡寛次著

紹介

『明治の御代―御製とお言葉から見えてくるもの―』

明成社 平成二十四年七月 四六判 三二〇頁 本体一八〇〇円



本書は明治天皇百年祭記念事業の一環として、明治神宮国際神道文化研究所の機関誌『神園』に三年間にわたり連載されたものを単行本化したものである。本書のテーマは、その副題にもみえるように、今まであまり顧みられてこなかった御製に焦点をあてることで、明治天皇を主人公とした新しい明治史を通観することである。本書の構成については筆者による「まえがき」に詳しいが、その各章はテーマ別に分けられている。まず第一章では明治天皇のご誕生から青年期までを、明治維新と六大巡幸を中心に描いている。筆者は明治天皇の強靱な精神力と確固たるリーダーシップは、この度重なる巡幸によってもたらされたとして、その重要性を指摘している。第二章では大日本帝国憲法の制定と明治天皇について、第三章では教育勅語について描き、「帝国憲法が法律面での明治国家の支柱になったとすれば、教育勅語は精神面・教育面で明治国家の支柱になったということが

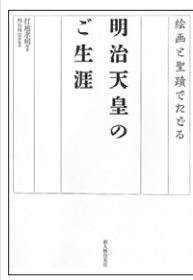
出来る」と指摘している。また第四章では日清・日露戦争を中心に、明治天皇と軍事面の関わりを、その前史となる軍の構想から軍人勅諭にいたるまで幅広く描く。第五章では第四章の二大戦争を踏まえた上で明治の外交と領土問題について描いている。幕末の領土問題に始まり不平等条約の改正に至るまで、明治の御代が如何にこの条約改正に費やされてきたのかがうかがえる。第六章では、明治の祭祀について、明治天皇がどのような姿勢で臨まれていたのかを中心に描いている。終章では、明治天皇の崩御の意義、そして明治の御代を現代の私たちがどのように捉えるべきであるのかを考察している。本書は御製やお言葉を中心に描くことにより、その時々における明治天皇のご存在やお考えが、新たな側面を伴ってみえてくるだろう。明治天皇崩御から百年の節目を迎える本年に、是非とも読んでおきたい一冊である。

打越孝明著・明治神宮監修

紹介

『絵画と聖蹟でたどる 明治天皇のご生涯』

新人物往来社 平成二十四年七月 B5判 二〇七頁 本体二〇〇〇円



平成二十四年（二〇二二）は、明治神宮の御祭神である明治天皇が明治四十五年（一九二二）に崩御されてから百年、また嘉永五年（一八五二）にご生涯になつてから百六十年という節目の年にあたる。本書は、明治天皇のご生涯について、聖徳記念絵画館（東京都新宿区霞ヶ町

一一・明治神宮外苑内）に陳列されている八十枚の壁画（日本画・洋画各四十枚）をすべてカラーで掲載し、あわせて全国各地に残る明治天皇の聖蹟を紹介している。

本書では、明治天皇のご生涯を描いた「御降誕」（一）から「大葬」（八十）までの八十枚の壁画を全四章に大別して説明している。第一章「幕末の動乱（一～十五）」、第二章「明治の御一新（十六～三十七）」、第三章「近代国家への道（三十八～五十七）」、第四章「戦勝と崩御（五十八～八十）」の各章で、壁画に描かれた場面やその歴史的背景などについて解説している。また、各壁画を描いた画家や奉納者、壁画に描かれた聖蹟の現状写真や地

図が紹介されている。さらに、山下裕二氏（明治学院大学教授）の特別寄稿（「絵画館」の意義を問い直す）のほか、著者による三本のコラム、解説（「聖徳記念絵画館と壁画について」、年譜（「明治天皇とその時代」）などが収録されている。

著者の打越孝明氏は現在、明治神宮国際神道文化研究所の主任研究員を務めており、同研究所の機関誌である『神園』に「明治天皇聖蹟の調査と研究」を、明治神宮社報『代々木』に「聖蹟を歩く」を連載中である。本書にはこれらの聖蹟研究の成果が反映されている。

明治の終焉から百年を迎えた平成の日本において、今一度、明治天皇を、そして、幕末の動乱から明治維新の大業を経て、近代国家へ発展を遂げた明治という時代を新たな視点で見つめ直すために、本書は極めて有意義且つ画期的な歴史資料であり、一般江湖にも広く推奨する一冊である。

紹介

『靖国神社』

PHP 研究所 平成二十四年八月 四六判 二一六頁 本体一三〇〇円

本書は、平成十九年に神社本庁研修所主催により神職を対象として実施された、専門研修「靖国神社」での成果を一般に還元する目的で、その講義録に加筆し、刊行されたものである。

まず、前靖国神社欄宜債務部長・沼部順明氏「靖国神社を学ぶ」では、靖国神社の祭祀を中心に、その創建から戦後の合祀の実情まで幅広く述べられている。また同氏による詳細な年表が付されており、靖国神社における祭祀の概要を把握するための貴重な資料となる。次に弁護士で靖国訴訟にも関わる徳永信一氏による「靖国訴訟」の実相」では、原告の反靖国の主張を詳細に分析し、戦後靖国神社が如何に国民から遠ざけられてきたのかについて論じられ、次に「小野田自然塾」主宰・小野田寛郎氏の「靖国神社と日本人」では、実体験に基づく靖国観についての講演が収録されている。また、千葉工業大学准教授・河田明久氏「靖国神社と美術」では、遊就館

にまつわる展示品の紹介から展示方法までを紹介し、これら遊就館の展示からみえてくる新しい靖国観が提示されている。そして國學院大學教授・阪本是丸氏「靖国神社史Ⅰ」、同・大原康男氏「靖国神社史Ⅱ」においては、国家・宗教、そして靖国神社について歴史的側面を中心にした講演が収録され、各時代背景を考慮した上で「歴史認識」を提示している。また、巻末には、同企画に賛同した小堀桂一郎氏の寄稿「近代史の苦難の象徴 靖国神社」が合わせて収録され、「靖国問題」の理解と、その克服法について提示をしている。

靖国神社との距離が遠く離れてしまった戦後世代にとって、靖国神社のすべてを網羅した本書は、最良の教科書となるであろう。明治天皇百年祭記念として本書が刊行されたことの意義も踏まえつつ、改めて靖国神社について考え直すきっかけとしたい。

